フィールド(現場)からの風 ⑫⑪

宮田守男

多くの関係者が協力し合って継続することの大切さを考えてみませんか

全国的に猛烈な暑さとなった7月26日。白馬は、7月の観測史上最高の34・2度を記録。その厳しい気象条件の中、長野冬季五輪会場を走る「第17回白馬スノーハープクロスカントリー大会」の競技役員として参加する機会があった。熱中症対策の水分補給を促す場内放送が幾度となく流れる会場。レース前の緊張も重なり救護所も慌しさが伝わってくる。

初日は、9部門に分かれての駅伝競技、2日目は個人種目だ。参加者は2300人、県外からの参加者も多い。運営スタッフは行政区や各種スポーツ団体、各種団体も協力する村挙げての大会として毎年運営されている大会だ。

私たちが所属する白馬村壮年ソフトボール連盟は、5人が参加して周回係に当たる。多くの選手への声援や、話をするなど、身近に選手と接することができた。誰もが言葉にするのが、芝生場の環境の良さとコースのハードさだ。小中学生が1・5㌔、高校・一般が4㌔の距離。駅伝競技では短めな距離だ。スタートから全力で走る選手が、最初の上り坂ですぐに選手の顔が極端に苦しくなってくるのが分かる難コース。上りや、下り、カーブが連続するコースは、オリンピックコースとして国際スキー連盟が要求した国際的な難コースだ。

「十分な練習を積んできたが、今回も苦労した」、「後半の上り坂まで走力が続かなかった」の声が多い。こんな環境で練習して見たいとの選手。しかし私が知る限り、会場では、スノーハープの魅力の積極的な情報発信や、合宿を誘致する場面には出会わなかった。大会関係者に、選手の宿泊事情を尋ねたが、ハッキリした返事は聞こえてこないし、会場周辺の観光協会の関係者も実態は把握していないようだ。だが選手と話をすると「昨日泊まりました」、「今日泊まって、慰労会を盛大に」との声も多かった。

全国では地域活性化を試み、各種スポーツ大会や行事がめじろ押しだ。地元の宿泊への期待とは結びつかないことも多い。だが、この機会は「白馬」ファンも多く誕生していることも事実だ。大会開催までには、多くの課題はあるが、継続して開催している関係者に改めて賛辞を贈りたい。

今年も大会を盛り上げるゲストやゲストランナー。その中でも「よしもとクリエイティブ・エージェンシー所属の宮川花子師匠」の登場だ。宮川大助師匠との夫婦しゃべくり漫才で知る人も多い。お互い体調を崩す時期もあったが、助け合う夫婦の姿に心のぬくもりを感じたのは私だけではないはずだ。

お互いの趣味はマラソン。大助師匠が倒れるまでホノルルマラソンに毎回参加していた事でも知られている。今年、吉本ナショナルDREAMSメンバーを招待したことがキッカケでの参加のようだ。まだ50歳代だが、独特な話術が会場を包み込み、スタート10秒前まで盛り上げるプロ意識に驚かされる。

マラソンランナーの野尻あずさ選手、オリンピック出場の地元出身の成瀬野生さん、オリンピック競歩競技出場の酒井浩文選手さんらが、子どもたちに伴走して、走る事の楽しさを一生懸命伝える姿が、新鮮に映る。

競技種目がスタートするたびに、行政関係者がスターターを務める放送が続く。いろいろなイベントに参加するが、行政関係者が前面に出る異様な雰囲気を感じてしまう。大会継続には必要な事なのだろうが、参加者に夢を描いてもらう、知恵を巡らしてみてはどうなのだろうか。

この大会の参加者の多くがブログで情報発信している現状がある。「1番遠距離からの参加者」、「喜寿・還暦での参加者」、「連続出場者」、「今年結婚するランナー」など有り余る情報があるはずだ。大規模な大会のスターターを務めるチャンスは貴重な体験の機会だ。大会をより告知する機会と考えてみてはどうだろうか。

個人レース8㌔の部門参加者に声援していると、うれしそうに拳を上げながら「私、今年68歳」と満面の笑顔でゴールに向かう女性ランナー。大会参加は、順位や記録以外に、参加することに意義のある人も多い。競技大会とは異なる、多くの関係者が協力し合う大会の雰囲気が改めて大切と気づかされた大会でもあった。

(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)

駅伝競技の醍醐味(だいごみ)やたすきと絆、素晴らしい感動を得るため、来年は会場で声援を送りませんか